

新板

飛騨匠物語

六

~ 13  
3035  
6 止





へ 13  
3035  
6

斐色匠物語卷之六

からね

かくて山さまひとまじり松光もちの道みちを旅たびのよそひまじりよくあそびて松光まじりの袈裟けさ衣えを着きて法ほう

師しと見みせて頭づみん中ちゆうおおかかぶぶりりて髪かみを脊せ子こ負おひひて由ゆくくよよああつつねねのの旅たびををびびききが

ああららひひあるあるををゆゆして人ひとよよけけみみてて姫ひめ官くわんのの庄しやう供くわうもも思おもひひ苦くるししきき事こと数かずままをを

おおややりりととああをを是こゝ天てん地ちのの神かみももたたままけけよよ草くさままぐぐととああるるまま歌うたああととおお誦じゆんああととして

山やまをを越こええりりてて床とこををななままきき植うゑ生せいのの小こ屋やああららひひあるる津つのの宿しゆくああららひひ夜よをを

ああららひひととかくかく思おもひひてて行いくく旅たび道みちももたたららずず十日じゆっぴつああららひひをを経へててかららう

ああららひひ遠とほ江えのの国くにああららひひははままみみくくるる日ひへへ西せいかかららむむままてて海うみののううらら霧きりここららりりとと

中ちゆうよりより鐘かねのの音ねももああららひひとと物ものかかづづままてて行いくくけけああららひひとと人ひとののああららひひははくく山やまをを

下したアアととままららふふ入い相さうのの鐘かねのの耳みみちちららくくひひままききくくるるもも夕ゆふ暮ぐれままををととびびくくとといいふふここ

斐色匠物語卷之六

七

昭和九年  
七月二日





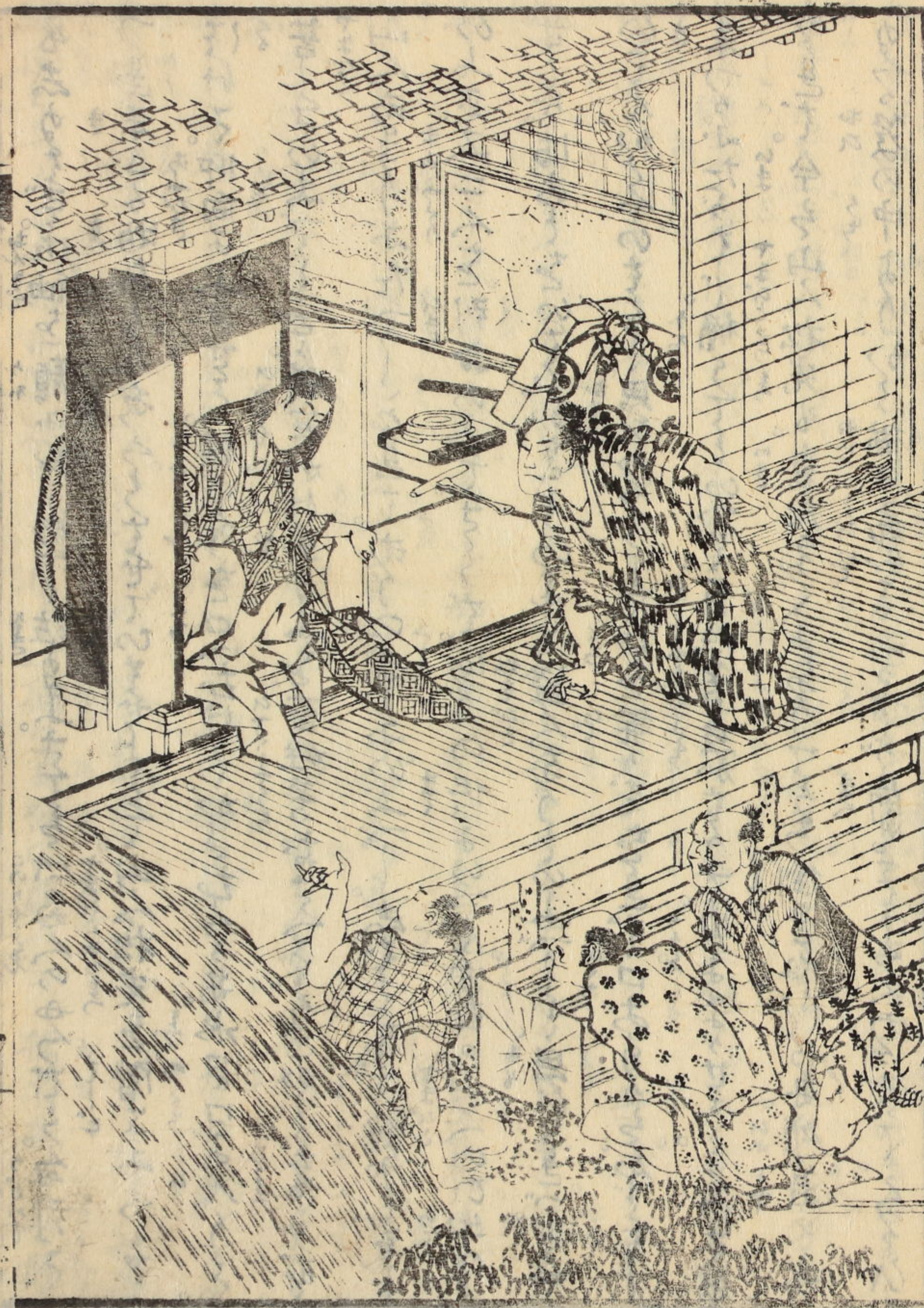












山人  
松光  
旗の宿  
盗人  
うきめ  
刃の



















宿のあり  
遠平猫のから  
くりをりてあり  
山人松光をたそ  
父の恩人ありとて  
百姓しもよひひ  
飛宮の正徳とて  
あつまひ  
くまひ

百鬼夜行記



百鬼夜行記

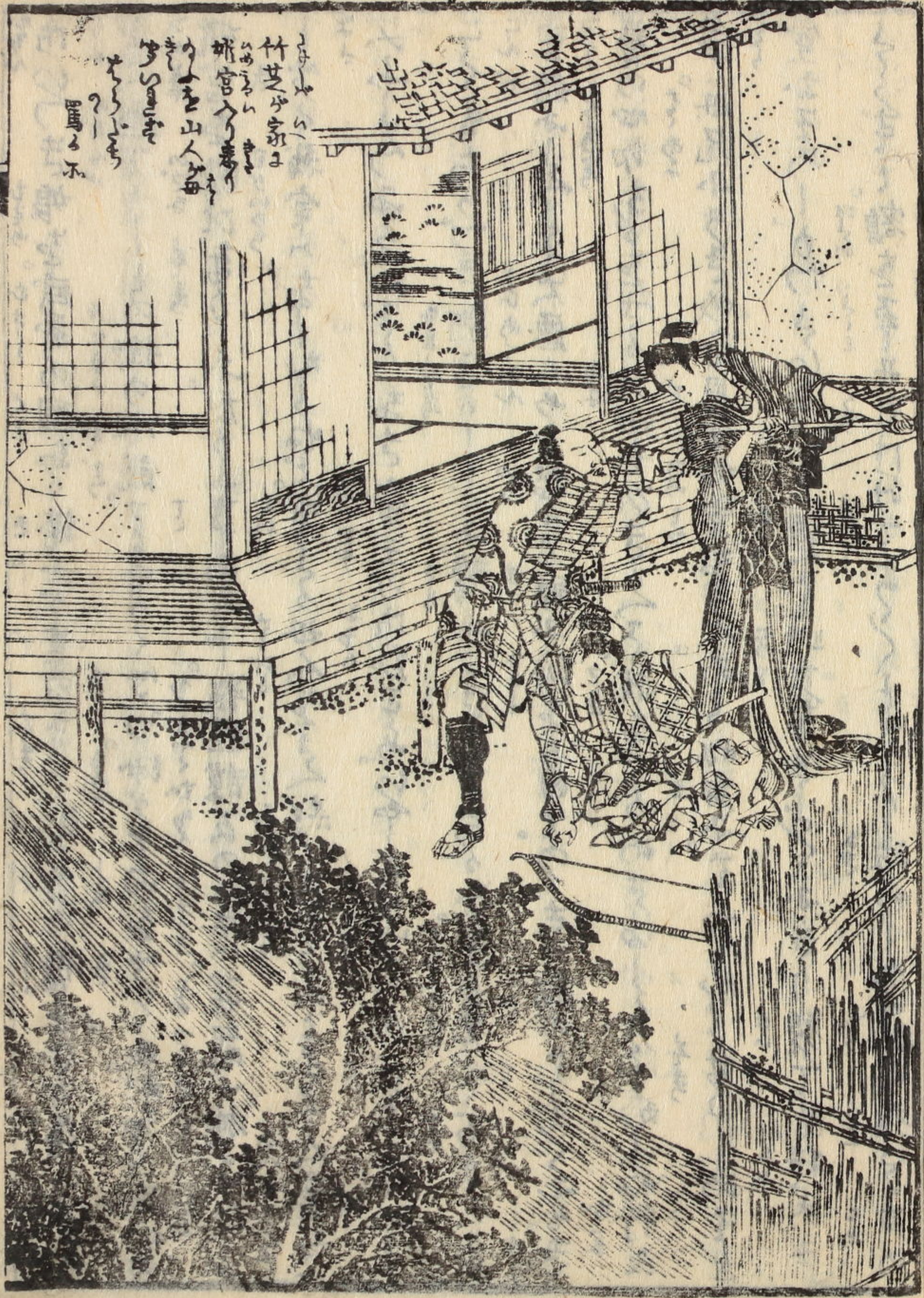












竹芝の家  
新宮入り  
山入り  
Sawaki  
馬ふ

正徳二年五月五日



新宮入り



市しつま娘を武彦の国ある清士が奪ひたり勢多の橋をまゝ落し東の  
 方へ逃下りしもの街の風説こそよよく噂の噂がや雨を降く母かあきさかの  
 娘官を誘ひたりふたりふ事ありと叛逆謀反の輩に其罪一族子らぶ  
 と多く我命を奪かかねど老るる母人をまゝ殺しなるとせらる人畜生  
 又やうらみちかぎりなき帝王の世むさありやまの山ぐの身とてか  
 こゝもちうづき馴なりのいふ勝ふともいふあるを奪なりて下りし  
 言語ふとく大悪人めと怒り眼涙をうけてのち詞のそくも  
 養の心切あるをさる兄あさひまうて我ながらあははしくかかね行  
 志て母兄ふらまめを見せ娘官をすあうねあふさあうかあまうあま  
 室おそろしめいあーと思ひだけ身をまじくふまり裂ても後あま  
 しくざと額を奪めおはけてよしくとせり泣やうの母も枯る声の

下ふあまもあまもあまの世の争く東事あるあまぐき世の世あま  
 罪人となりて頸きくきて死ある子を見せくいで見てあまもあま  
 ささふ叙せかあまあまの山人が答ふとらばあまをいであまあま  
 母のようすのいほほ胸おせあうと棹丸も帯をさて袖に倒れ袖を  
 嚙てぞ泣ふるかうとあまあまあまあまあまあまあまあまあま  
 かへて遠平つらあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま  
 娘官の肉をとりてを貴子ふらたあまあまあまあまあまあまあま  
 体おあうと壁お向ひをり娘官のいもうあああまあまあまあまあま  
 棹丸もくあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま  
 物ものいびくあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま  
 したこのいびくあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま







くる。婚言は後をおさんくけをさす。のまきゆひて。まきゆくま。この世の  
 事。直に流のる。お入まりて。物か。く。ひ。家ふたがたまき。其時見。舞も。さ。ら。う  
 か。こ。ふ。か。う。て。あ。り。の。う。あ。ま。だ。見。く。ま。は。事。た。が。ひ。て。く。か。く。苦。し。き  
 して。又。う。ち。う。ち。う。ち。泣。ひ。が。と。も。生。て。都。ふ。る。づ。ま。身。あ。く。ね。ま。つ。あ。く  
 や。も。か。く。も。あ。り。果。ん。と。前。あ。る。川。を。見。ゆ。ふ。み。糸。あ。せ。く。見。え。々。と。た。一。死。耻  
 見。ん。い。う。く。そ。か。う。ぬ。づ。け。下。つ。せ。り。潮。や。あ。く。ん。か。こ。ふ。行。く。身。を。投。か。や  
 して。あ。り。う。め。ひ。が。さ。は。さ。が。な。は。ち。や。残。り。ん。く。く。び。と。あ。く。戸。の。ひ。ま。より  
 さ。し。の。ま。き。ゆ。ひ。つ。さ。て。は。裾。を。ひ。き。が。げ。て。川。下。を。さ。して。ま。り。の。め。ぬ  
 山。人。い。ふ。か。く。丹。生。て。あ。づ。ま。身。子。あ。く。ま。と。て。刀。と。う。て。死。あ。ん。い。ま。る。を  
 松。光。遠。平。と。が。り。つ。く。と。む。母。あ。く。と。う。く。と。あ。く。い。ぬ。は。し。り  
 山。人。い。ふ。く。け。て。よ。海。を。こ。う。う。山。を。お。え。て。を。ん。あ。く。な。ま。は。方。の。を。く。く。さ

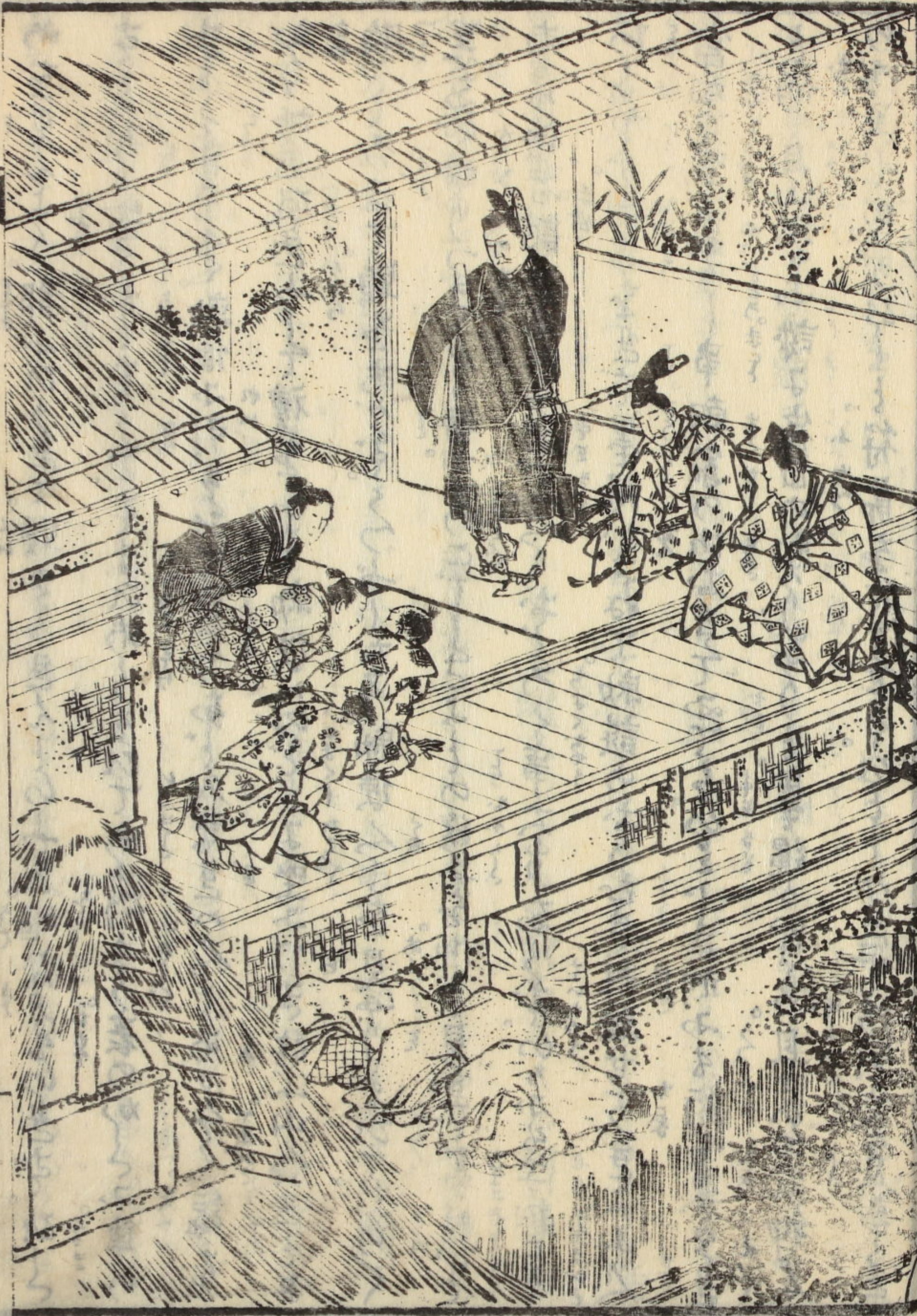
あ。づ。ま。み。下。り。の。め。ひ。い。お。ま。と。あ。く。と。う。く。思。ひ。あ。め。る。何。り。か。く。ま。尻。を  
 さ。く。あ。く。い。う。や。さ。か。く。け。あ。さ。い。け。姫。が。身。ふ。と。う。て。ま。ん。な。あ。く。づ。ま。詞  
 ぶ。ま。あ。く。そ。を。な。つ。ま。あ。く。お。あ。く。て。ま。く。や。う。あ。ま。ま。い。く。と。こ。ぬ。が。命  
 の。た。ま。け。し。う。ご。か。い。か。さ。う。の。お。り。の。姫。が。心。を。十。が。一。も。思。ひ。あ。く。ば。あ。く。く  
 居。て。く。ま。よ。と。て。袖。を。ま。が。り。ま。ぞ。棹。も。齒。を。く。の。ま。ぞ。る。松。光。と。さ。う。あ。り  
 遠。平。と。目。お。の。ご。ま。道。理。あ。る。松。光。立。く。切。戸。を。明。見。生。の。姫。宮。へ。見。え  
 十。せ。の。り。ま。い。う。よ。い。づ。く。子。行。ゆ。ひ。を。ん。と。見。か。向。ひ。より。村。長。走。り。集。り。て  
 思。ひ。よ。く。ま。都。よ。り。市。軒。使。り。せ。り。守。殿。介。殿。を。ま。め。み。を。供  
 ま。く。け。ま。お。ま。さ。き。用。意。あ。ま。り。ひ。び。く。引。返。し。ぬ。お。ね。山。人。ら。仕。業。あ。る。事  
 顯。き。て。か。く。めて。罪。せ。さ。せ。ぬ。ま。あ。く。と。う。く。を。逃。く。い。ね。と。母。の。あ。く  
 ぞ。く。ろ。み。あ。り。く。お。く。出。き。山。人。の。た。あ。く。ひ。て。け。上。り。逃。う。く。ま。て。人。集。り。あ。る





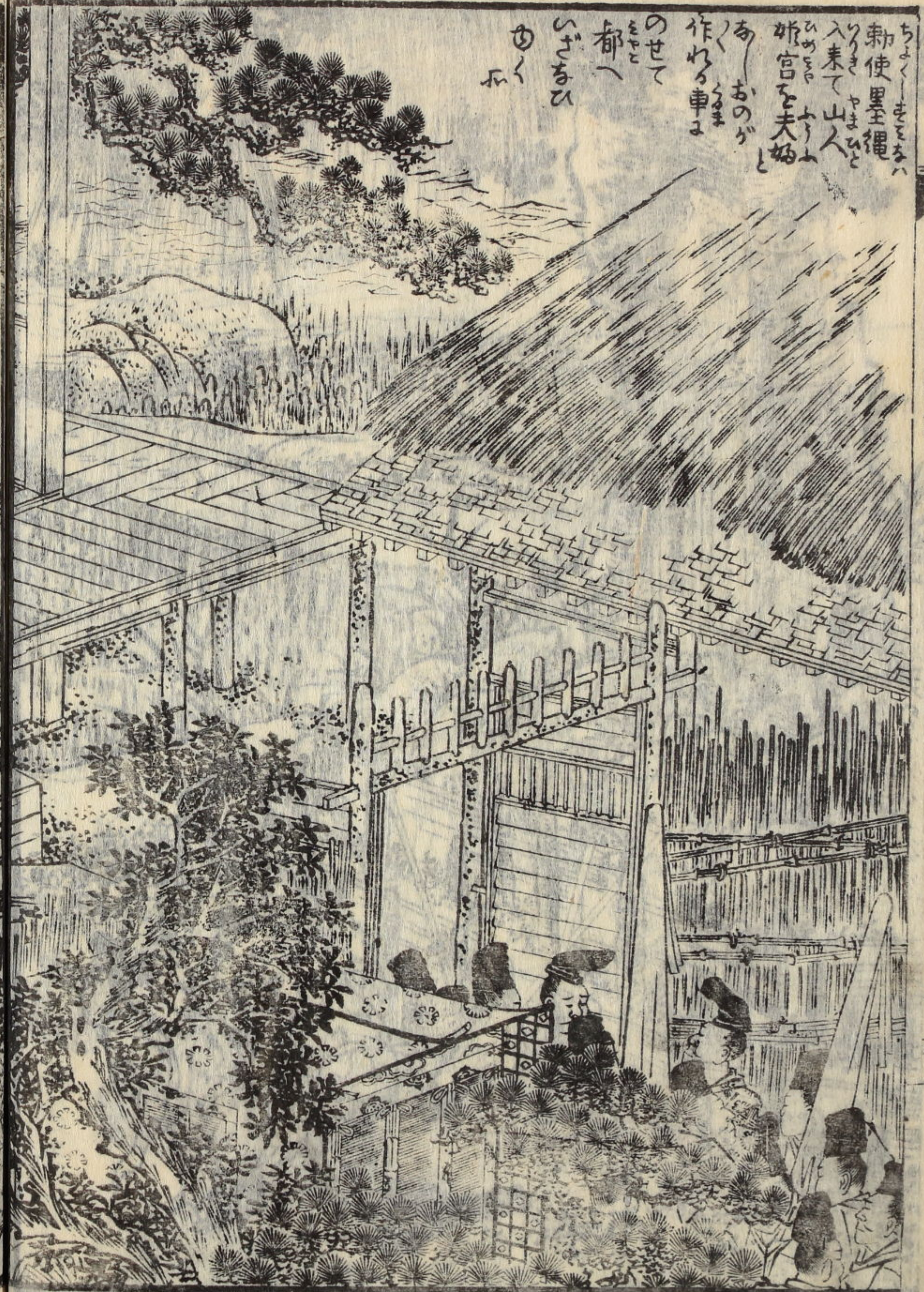
井芝の  
百姓ども  
知伸を  
むく  
お





新使墨繩

十一



ちやくまをな  
 新使墨繩  
 入来て山人  
 ひめをふらふ  
 姫宮を夫婦  
 作る車よ  
 のせて  
 都へ  
 いざちひ  
 のく

丹波正物誌卷之二

十六







おもしろさまさまのびあがりつて見ますせきくく目を見あをせきくく  
 うせやまのびつらんとはみいせぬとやうくふも胸をびせしる墨縄  
 まごおちるおちるさまのちいさなうさぎの池子身をあげぬ  
 娘宮の池をさかしく拜しなうさぎよと寝てありて門子とくは車乃  
 福とりのけり初めて轂をうつと見えしおけ車おのせしきしとく細の  
 ちしお到りて止りぬさて車の池を離ちのせしとくは巻未がりては  
 娘宮の池をさかしくおちるおちるさまのちいさなうさぎの池子身を  
 命をいのせびて池手をあさせぬとくかこぢけあまのりの回よりあして  
 娘宮をさかしく車おなりの事と不審さ身をさ其よにおのせ語りやさんと  
 仕下どもの中をかまこりて立出っ人あり見きて勢多きと別きて舟子  
 法師石の手ひしえの瓢を推してさかじのめしお坐を志む事と推して

たしとよりて思ひよろぬ親人の池の国とぬらをつまてよあさるお船主  
 いひらるへおのせ勢多きとくお別きて後替名郎ぬのめし舟行きて  
 かうくと語りつせし娘宮の池の上甚おつらあては法師とく逃つま  
 なりて見えがらし舟守護しなうさぎよとさきてゆが其まゝをがく池  
 赤とを菓ひいそぎ下りてありの舟と娘宮の東をさかしく走らう  
 おふあうろ得ぎとあちあちつきて追つきてあうおさやの池子到りの  
 て池身を沈めぬあんとまをぶぐぐらとまゝとあまゝせてさるぐあうら  
 なる舟子勅使の通うせぬふとあてかこお忍びゆを墨縄ぬとなく見  
 つけぬとみ舟池車子なりてあままで池借志なりつたも勅使の  
 かこぢけあさるかこ老法師は骨志とてありかこくことむさあも喧  
 ろまかりあんと空を仰まてさうくと泪をぞあうらるごま世を捨し



















